

## ドネリーのアメリカ的世界

——小説『黄金の壺』をめぐる——

大井 浩 二

数年まえにレオ・マークスが図式化して以来、ほとんど定説的になったといえるだろうが、「楽園」と「機械」の対立、葛藤という主題はアメリカ文化を考える場合に無視できなくなっている。十八世紀末にアメリカ合衆国は農業国として出発したのであったが、その後のアメリカの歴史は、その本来の姿からたえず遠ざかる方向にむかっていた。工業国アメリカが確立するにつれて、テクノロジーと牧歌的理想との対立はいつそう明確となり、アメリカ文化の唯一の中核的問題になったとさえ考えることもできるだろう。この問題はマークスをはじめとして、H・N・スミス、R・W・B・ルイス、D・W・ノーブルなどのすぐれたアメリカニストたちの書物によって検討されているだけでなく、現在でも多くの学者批評家によって研究されつづけている興味ぶかい主題である。とりわけ、十九世紀末から二十世紀のはじめにかけては、フロンティアの消滅という事件を契機として、アメリカ文化にひそむ根本的矛盾がはっきりと形をとるようになってくる。「一八九〇年から一九一七年かけの合衆国のインテレクチュアル・ヒストリーは、十九世紀におけるアメリカの急速な都市化、工業化によってひき起こされた深刻な文化的危機の表現として把握すると一番よく理解できる」(1)とノーブルは論じて

いるが、そのような「文化的危機」を鋭敏に感じとっていたアメリカ人のひとりがある。ここで考えようとするイグネイシャス・ドネリーであった。

ドネリーは一八三一年、アイルランド系の医者の子としてフィラデルフィアに生まれた。一八五六年にはミネソタに移住、西部での成功を夢見たが、この夢はあえなくついでにしまう。その後、政治家となって、ミネソタ州の副知事を務めたあと、同州選出の下院議員として活躍したこともあり、とくに一八九〇年代には人民党の有力なメンバーとして知られていた。一九〇〇年に人民党の副大統領候補となったこともあったが、一九〇一年一月一日、心臓発作のためミネアポリスで急逝した。生前、ドネリーは文筆家としても著名であって、考古学的な研究『アトランティス』(一八八二年)や『ラグナレク』(一八八三年)のほか、シェイクスピア・ベーコン説を唱えた大冊『大いなる暗号』(一八八八年)を世に送っている。小説作品としては、逆ユートピアの姿を描いた『シーザーの記念柱』(一八九〇年)や人種差別に反対した『ドクター・ヒューゲット』(一八九一年)のほか、ここで取りあげようとする『黄金の壺』(一八九二年)を書き残すなど、まことに多彩きわまりない生涯を送った人物であった。彼の一連の作品は、文学的価値には乏しいけれども、アメリカの「文化的危機」を知るための重要な資料となっているのである(2)。

ドネリーの三冊目の小説『黄金の壺』は一八九二年に出版された(3)。この小説は、作者自身が「はしがき」のなかで断っているように、「文学作品をつねにきわ立たせている、あの洗練さと精巧さを欠いている」

が、それはこの作品が一八九二年におこなわれていた「大いなる政治的闘争の産物」であったからにはかならない。彼の代表作『シーザーの記念柱』の場合と同じように、『黄金の壺』は「物語という薄い偽装の下で、人民党によって提唱されている新しい考えのいくつかを説明、弁護することを意図した」作品であった。とりわけ、この年のワシントンの誕生日、オマハで開かれた人民党の大会において、ドネリーは党の運動方針を述べた綱領の序文を執筆していたのであるから、『黄金の壺』と「人民党によって提唱されている新しい考え」とは、とくに密接な関係をもっていたといえる。

一八九二年に発表された「オマハ・プラットフォーム」は、「人民党に関する文献のなかでの基本的資料」とみなされ、「人民党の信条の包括的な表明」である<sup>(4)</sup>、という評価が下されているのだが、『黄金の壺』を考える上でも欠かせない文章であると思われるので、その冒頭の一節を引用しておきたい。

われわれは道徳的、政治的、物質的崩壊に瀕している国家の、まったく中で集まっている。腐敗は投票箱、州議会、国会を支配し、裁判官の地位にまで及んでいる。人民の風紀は乱れ、州の大半はいたる所に見られる脅迫や贈賄を防止するため、投票所において有権者を隔離することを余儀なくされている。……都市の労働者は自衛のための組織の権利を拒否され、海外からの安い労働が労働者の賃金を低下させ、法律によって認められていない金銭ずくの常備軍が労働者を射殺するために配置され、労働者は急速にヨーロッパ的な悪

条件に陥っている。数百万の人間の汗の結晶は、少数の人間のための巨大な財産を築くために、堂々と奪い去られているが、これは人類の歴史において類を見ないことであり、他方、この財産の所有者たちは共和国を軽蔑し、自由を危険に陥れている。政府の不正という同じ多産な胎内から、われわれは二つの大きな階級——浮浪者と百万長者を産み出しているのだ。

いささか長い引用になったが、『黄金の壺』は、「オマハ・プラットフォーム」に述べられている精神を、「議論」と「ロマンス」を織り混ぜた形で、広く一般にPRすることを目的にしているといつてよいだろう。さらに、著者ドネリーにいわせると、「文学的技量の完成」などよりもはるかに重要なのは、「読者に考えさせる」こと、「大衆のよりよい生活条件のための新しい道を開く」ことであり、「これらの目的が達成されれば、ほかのすべての考慮や結果にはいっさい無関心でいられる」ということになるが、この言葉もやはり額面どおりに受けとっていいと思われる。

『黄金の壺』の主人公で語り手のエフレイム・ベネゼットは、カンザスの片田舎に住む青年だが、農業を営む両親との生活はまったくのどん底の状態である。イナゴの襲来、不作、物価高、重税といった日常生活の苦しみはたえるいとまがなく、家や土地はとっくの昔に抵当にはいつている。借金はかさむ一方で、ついに主人公一家は住みなれた土地を追われて、都市へ流れて行くことを余儀なくされる、というのが、冒頭に描かれている場面である。エフレイムにはソフィーという恋人がいたの

だが、農民であった彼女の父親もまた家や田畑を人手にわたし、「あの畑や森のゆたかな緑の小さなパラダイス」から「日々の糧を求めてなん千という飢えた人びとと闘うために、オマハの大都市」へ行ってしまっている。どうやらソフィーはそこで女店員となっただけでなく、貧窮のあげくにみじめな境涯に身を落としたのかもしれない、などといった噂も耳にはいつてくる。

こうした農村の荒廃ぶりは、まことにありふれた設定であって、現代の読者からすれば、一向におもしろくない、陳腐この上ない幕あきであるといえるかもしれない。農民の惨状、「田園のみじめさを飲みこむ大きな胃袋」としての「大都市」、墮落した田舎生まれの男女、などなど。いずれをとりあげても、すでに自然主義の作家たちの小説のなかで、いやというほどお目にかかっている世界にちがいない。だが、こうした農民の悲惨な状況は、ジェファソン以来、アメリカにおいては農民が「選ばれた民」であったという事実をぬきにして考えることはできない。すでにくり返し論じられているように、農民こそは道徳の退廃を知らない理想的アメリカ人像にはかならない、というジェファソンの『ヴァージニア覚え書』における主張が正しいとするならば、『黄金の壺』の冒頭における設定は、一九世紀末のアメリカがジェファソンの理想からいかに遠い位置にあるかを雄弁に示している。かつてのエデン的世界、新世界の楽園としてのアメリカが重大な危機に瀕していることを物語っている、といいかえてもよい。というよりも、こうした危機的状况に対応するために出現したのが人民党であったという事実を指摘すべきだろう。ドネリー自身、「オマハ・プラットフォーム」において、「人類に

対する巨大な陰謀が二つの大陸で組織され、それが急速に世界を支配しつつある。直ちにそれに対処して転覆させなければ、それは恐るべき社会的変革や文明の崩壊や絶対的専制主義の確立を予言している」と書いていた。こうした「陰謀」がはっきりとした形をとって描かれたのが、『シーザーの記念柱』であったのだが、この『黄金の壺』においてもまた、ドネリーの危機意識を鮮明に読みとることができるのである。

さて、われわれの主人公は、いよいよカンザスの土地を捨てて行かねばならぬという日の前夜、奇妙な夢をみる。枕もとに不思議な老人が立ちあらわれて、彼に黄金色の壺をさし出すが、これはありとあらゆる金属を黄金に変えることができる液体のはいった魔法の壺であった。翌朝、目をさました主人公の手に、夢にみたままの壺が残されている。こうして、「なん百年ものあいだ哲学者が求めつづけてきた錬金薬液」をさづけられたエフレイムは、「地上のあらゆる貧困をいやす力と、世俗的な権力のすべてを掌握する力」をわがものとすることになる。結局のところ、『黄金の壺』は、マーティン・リッヂが指摘するように、「卑金属を金に変える液体のはいった壺を手に入れたカンザスの青年エフレイム・ベネゼットの冒険をめぐるファンタジー」(5)にすぎない。だが、ドネリーの作品は一般的にいつてSF的な色彩が濃厚であったわけだし(これはフィクションとノンフィクションの両方にいえる)、『黄金の壺』の読者としては、その「ファンタジー」性に群易しながらも、主人公の「冒険」の意味を考えざるを得ないのである。

ともあれ、エフレイムは黄金の壺を利用することによって、「現代文明の悪魔」<sup>ドラゴン</sup>ともいふべき抵当の問題を片づけ、一家離散の不幸を未然に

防ぐことができただけでなく、一躍大金持ちになることができるのだが、この突然の幸運を喜びながらも、「奇妙な変化がわたしのなかで徐々にあらわれた」ことも忘れずに書きとめている。

この黄金の壺のなかに巨万の富の源がはいっているとわかったとき、わたしが考えたことは、家族とわたし自身を悲惨な状態から救い出すということだけだった。安楽、喜び、人生のぜいたくな品々、書物、音楽、楽しい交友、旅行、教養、人間の心を楽しませるのに役立つすべてのもののイメージが浮かんできた。だが、熱っぽい眼差しと熱心な、ゆがんだ顔つきの群衆を眺め、苦しい環境との絶えざる戦いに関する昔ながらの例の物語をそこに読みとったとき、わたしの心は彼らのほうにむかい、彼らを助け、人類をより高貴に、より幸福にするために、できるだけのことをしようとした。

この目的の達成のために、主人公はさまざまな方面でエネルギーに活躍しはじめるのである。

まず彼はヘイズという弁護士を代理人として、家や土地が抵当にはいっているカンザス州の農民の救済にのり出し、わずか年二パーセントという安い金利で融資することを決定する。そのあと、彼はフィラデルフイアに足をのびし、そこに居をかまえて、大量の金ののべ棒を製造しはじめる。「死んだ、黒い鉄の塊り」を「なん千という立派な人びとを悲惨な状態から救う手段」に変えるのである。エフレイム自身がひとりごちているように、「創造力をもった黄金の壺の数滴は、人間の知性のな

かにたらしこまれると、一国の国民の思想、文学、歴史を変貌させるに十分な力をもっている」のである。「お前とおれとで人類を隷属状態から解放してやろう」と彼が壺に語りかけるのもきわめて当然のことであった。こうして無限の富の所有者となった主人公は、アメリカ経済界に根本的な変革をもたらすことに成功する。登場人物の一人が語っているように、金が鉄や鉛と同じように豊富になってしまうと、これまでの体制は一変せざるを得なくなるわけだ。

他方、主人公はふとした偶然から、行方不明になっていた恋人ソフィーに再会することができる。彼は「わたしの宝物が純粋で、きず一つない姿でわたしの手もとにもどってきた。わたしは世界一幸福な男だった」と書き、やがて彼女と結婚する。そして、このソフィーの提案によって、働く女性のための理想的な環境づくりがオマハではじめられる。

それは「女性のための生活協合組合」ともいうべき組織であって、「金持ちの女性や中流階級の女性が、正直な労働者である不幸な姉妹たちを救い、助け、向上させるため、中間業者の介在なしに、その女性たちが作ったものだけを購入することに同意する」というのであるから、きわめて現代的な性格をもっていたと考えられる。この計画は大成をおさめ、「地上は美しく、平和で、幸福と希望にあふれ、あらゆる親切と善意にみちていた」とエフレイムは回想する。貧富の壁は解消し、人びとは全力をあげてこの大いなる実験に参加する。「こうして、人類を変革させることになる限りない仕事はじまった」とも主人公は書き記している。

このように、黄金の壺の力によって、ソフィーの計画は順調にすす

み、カンザスでの救済事業も成功をおさめるのだが、アメリカ全体としては、まだ完全な状態からはほど遠い。そこで「黄金を作る男」としての主人公は、全国的な規模での改革を実現するため、首都ワシントンにおもむき、立錫の余地のないほどに傍聴人であふれた下院議事堂において熱弁をふるうことになる。そこでの主張には人民党の意見がもりこまれているという意味で興味ぶかいだけでなく、かつての日、国會議員としての雄弁ぶりを知られたドネリーの面影をこの場面に読みとることも不可能ではないといえるだろう。ともあれ、この演説のなかで、エフレイムは「繁栄と人間生活の美しさと勤勉の栄光」を回復させるべきであることを説き、「地上のあらゆる土地における人類の略奪を全廃しなければならぬ」と訴える。そのための有効な手段をいくつか提案し、それを立法化することを議員諸公に呼びかけようというわけだが、それが実現のあかつきには、「なんとというすばらしい光景がわたしの目のまえにひろがることでしょうか!」とエフレイムは語りかける。「全国民が繁栄し、太陽が漁師の舟の上にのぼるとき、大西洋の岸辺から楽しい笑い顔がのぞき、夕日の黄金色の光がおどる波の胸から輝くとき、太平洋の上に笑い顔がのぞくことになる」といった一文を読むと、常套的な表現の羅列に苦笑を禁じ得ないのだが、ドネリーにとっては単なるレトリック以上の意味をもっていたにちがいない。こうした主人公の提案に対して、「財閥」の猛烈な反対があったけれども、結局は例の黄金の壺のもっている強大な力によって実現されることになる。

その後も主人公はアメリカ国民の幸福の追求のための戦いを、片時も休むことなくつづける。女性や農民の救済のための仕事を成功させたあ

と、彼は労働者のために理想的な都市づくりを計画する。エフレイムにいわせると、「都市は富める者や中流階級の者にはすばらしい機会を提供するけれども、労働者にはいかなる機会もあたえなかった」。都市においては、「最低の品物に最高の代価を支払い、安楽と幸福のために不可欠なものにもっとも困窮するのは、貧しい者たちの宿命である」とも書かれている。こうした都市問題を解決するために、主人公はニュージャージー州に広大な土地を買い入れ、そこにコオパレーションという名前の都市を建設しはじめるが、それは幾何学的に統一された、秩序正しい都市であった。たとえば、この新しい都市の中心には大きな円形部分があり、さらに一マイルごとに別の小さな円形部分が配置されていて、その周辺には「工場労働者に新鮮な空気と日光を保証する公園ないしは庭園」が作られる。街路の配列もきわめて幾何学的である上、それぞれの家は「庭園」の中央部に位置している。また、その円形部分の一つ一つの中央には「大きなホール」が建てられ、読書室、講演場、その他が完備していて、住民の精神的、物質的な条件は十二分に満たされる。さらにまた、ここに住む人間はすべて各自の家をもつことができるし、労働時間は一日八時間、酒場の類いは見る影もないといった具合で、まさに人工的な地上の楽園、あるいはドネリー好みのアトランティスにおける理想都市、といった印象を読者は受けることになるのである。

こうして現出した都市は、都市につきものの墮落、混乱、破壊などのいっさいを欠いた理想世界にはかならない。だが、あらためて指摘するまでもなく、アメリカ的想像力において、都市はヨーロッパと同一視される悪魔的世界であった。たとえば、農民を「選ばれた民」とみなすジ

エファソンにとって、都市は否定されるべき存在以外のなに物でもなかった。「大都市の群衆が純粹な政治の支えにどれだけ役立つかは、腫れ物が人体の強さをどれだけ強めるかというのと同じであり、百害あって一利なしなのである」（榊原、明石岡氏訳による）という発言が『ヴァジニア覚え書』においてなされていた。ジャクソンの同時代のアメリカ人にも同じような都市観がうかがわれることは、J・W・ウォードの『アンドルー・ジャクソン』を一読すれば明らかになるだろう（註）。いかにしてアメリカから都市を追放するか、あるいはそれが不可能な場合、いかにして都市からさまざまな罪惡を追放するか、という問題は、十九世紀のアメリカ人を悩ましつづけたものであって、たとえばT・S・アースーの禁酒小説『酒場での十夜』（一八五四年）などは、都市と田園との対立というアメリカの主題を、グロテスクな状況において提示する物語であったといい切つてよい。

というよりも、『黄金の壺』における都市改革への関心は、その数年前に出版されたジョサイア・ストロングの『われらの国』（一八八四年）の延長線上において受けとるべきかもしれない。これは福音派の神学者として知られる著者が十九世紀末のアメリカの現状を考察し、いかにしてそこから脱出すべきであるかを、アングロサクソン中心主義の立場から熱っぽく論じた警世の書物である。これによると、かつて巨大な空間をかかえていたアメリカ、無限の可能性をひめていたアメリカに、さまざまな「危険」が迫ってきている。その「危険」とはカトリシズム、モルモン教、飲酒、社会主義、富、移民などであるが、こうした「危険」は、モルモン教をのぞいて、すべて都市に集中していて、都市

そのものが七番目の、そして最大の「危険」になっているというのが、そこで下されている診断であった。十九世紀末のアメリカにおいて、もはや都市の存在は否定すべくもないとすれば、それをいかにして墮落と混乱から守ることができるかという問題が、ストロングを悩ましていたのである。『黄金の壺』における理想都市の出現は、こうした時代の要請に答えようとする試みであったといえるのだ。

都市という問題にからんで、余計な回り道をしているように思われるかもしれないが、けっしてそうではない。たしかに、ストロングはカトリシズムやモルモン教や移民などに強く反対し、アメリカを、いや、全世界を「アングロ・サクソン化」することを目指している人物であるかのような印象をあたえる。この「アングロ・サクソン化」こそが「数多くの劣等な種族のあいだにおける異教という暗い問題に対する神の最終的かつ完全な解決策」である、という言葉は、彼の考え方をはっきり示している。だが、E・L・チューヴソンが説明しているように、この「最終的かつ完全な解決策」という表現は、「アングロ・サクソン化」が人類救済のためのすぐれた手段であるということだけを意味していると解釈するのがいいかもしれない（註）。そして、「わたしの主張は、『アメリカのためにアメリカを救え』ではなく、『世界のためにアメリカを救え』である」というストロングの言葉は、いささか尊大なアメリカ中心主義のにおいがするとしても、やはりドネリー自身のものである。といったいわねばならない。なぜなら、『黄金の壺』の主人公は、いくらかの曲折ののち、人民党の候補として大統領選に出馬し、ついにホワイ・ト・ハウスイりを果たすばかりか、ヨーロッパと交戦状態にはいるに

たるからである。その目的は、まさしく「世界のためにアメリカを救え」というスローガンを実践することにはかならなかったのだ。

ところで、エフレイムが大統領に就任した時点におけるアメリカは、「偉大さと幸福の高み」に達していた。人びとは勤労の喜びにあふれ、物質的にも精神的にも満ち足りた生活を送っている。長いあいだのしかかっていった過去の重荷は消えてしまい、「説教者たちは過去を忘れて現在について説教した」ばかりでなく、「キリストは、彼を殺した暗く、残忍で、野蛮な過去からやってきて、彼を愛する幸福で、笑顔にあふれた、教養あるなん百万もの人びとのなかを誇らしげに歩いていった」とも書かれている。まさにそれは「住むに価する世界」、時間と変化の否定されたユートピア的空間としてのアメリカにはかならなかった、だが、このアメリカがより偉大に、より幸福になるのをはばんでいるは「旧世界」である、とエフレイムは大統領就任演説のなかで述べ、「腐敗と死」の代名詞としてのヨーロッパをきびしい口調で非難攻撃する。

わが国は旧世界の不満を解消させるための安全弁であった。もしこの安全弁が閉じられると、ヨーロッパの王位はすべて二十年で吹っとんでしまうだろう〔大歓声〕。旧世界の人間たちは、餓死か、専制君主への抵抗か、のいずれかを選ばなければならなくなると、圧迫者にはむかつて、八つ裂きになってしまうだろう〔万雷の拍手〕。……この大共和国は金ピカの王座やボール紙細工の王冠のまや、それを身につけている破産した人非人や放蕩者のまやでふるえていなければならないのか？

こういった調子でヨーロッパを全面的に否定したあと、新大統領は「一七七六年の原則」を「あらゆる大陸、あらゆる島に及ぼす」ことを誓い、「偉大なる共和国は、全世界のしいたげられた者たちにむかつて、『われわれの享受する祝福はあなたがたのものとなる。奴隷として生きるよりも戦って死ぬのがいいことだ』という言葉をはじめて高らかに叫ぶのだ」と宣言するのである。

周知のように、アメリカは本来ヨーロッパを否定することによって出発したのであった。ヨーロッパは古い過去の制度や伝統と同義語であって、いわば悪としてのヨーロッパと対立するのが善としてのアメリカであるという図式が古くから存在していたことは、チャールズ・サンフォードの『楽園の探求』をもち出すまでもなく明らかな事実である<sup>(8)</sup>。その意味では、エフレイムの就任演説におけるヨーロッパのイメージは、この上なく常識的、常套的であるといわなければならない。しかし、そこでの彼の発言が「アメリカがヨーロッパの組織からみずからを切りはなし、独自の組織を樹立する以上に重要な事柄はない。……平和と正義がアメリカ社会の北極星となることを祈るならば、地球のあの地域〔ヨーロッパ〕とのいっさいのかかわり避けるべきだ」(一八二〇年十月二十日付の書簡)というジェファソンの発言を思い出させることも否定できない。あるいは、自然と大洋とによって、アメリカが「大虐殺をもたらすような動乱の地」ヨーロッパから遠くへだたっていることを神に感謝していた第三代大統領の第一回就任演説を思い出してもいいだろう。いずれにしても、『黄金の壺』におけるヨーロッパ意識の原点がジェファソンにあることははっきりした事実であるといいい切ってよい

だろう。

だが、この就任演説に対して、ヨーロッパの各国は露骨な敵意を表明し、戦闘準備の態勢にはいる。「自由と専制のあいだの積年の戦いが間近にせまった」のである。そこでエフレイムはアメリカ国民に布告を発して、あつという間に二百万の兵を動員し、まずヨーロッパの出鼻をくじくためにカナダを征服したあと、解放軍司令官となつて、ヨーロッパに進撃する。旧世界の各国のうちでは、イギリスが最初にみずからを解放し、アメリカ合衆国の国旗は「人類のための救済、しいたげられた者たちのための正義、人類の魂の最高の願望の勝利」を意味するようになってくる。それは一国の国旗であることをやめ、人類全体の旗じるしとなった、とも書かれている。このあと「怪物」視されるドイツとオーストリアが相ついで敗北するが、とりわけドイツとの対戦は三日間もつづく激戦で、ドイツ皇帝は「地球から永久に消えようとしている悪しき制度の英雄的代表者」として最後まで抵抗をやめない。

やがて大統領は「ヨーロッパ共和国連合」という新しい国家の建設を提唱し、参加する共和国はそれぞれ人口二百万あたり二名の代表をスイスで開かれる憲法会議に派遣する、という規定を作ったりする。一方では、「人類の敵、皇帝、国王、皇太子、貴族」などすべてがロシアに集中することとなり、「無知、迷信、狂信、専制」の支配するロシア、「地上における不正の悪魔の最後の拠点」であるロシアを相手に戦いがおこなわれる。結局、ロシア皇帝は味方のなかにまぎれこんでいたニヒリストによって暗殺され、善なるアメリカと悪なるヨーロッパの大決戦はアメリカ側の勝利におわり、地上に至福千年が実現するにいたる。だ

が、世界にふたたび戦乱がおこることを恐れるエフレイムは、永久平和を確立するために、世界機構としての「世界共和国」を提案することになるが、その事務局は失われた大陸アトランティスの山の頂上であると（ドネリーの考える）アゾレス諸島のサン・ミゲル島に置かれるという具合であるのだ。

もちろん、こうした一連の事件は、まさにファンタジーの世界の出来事そのものであつて、荒唐無稽なたわごととしかいいようがない。物語の荒筋を書きつけるのさえ気はすかしい思いがするのだが、他方では、マーティン・リッヂが指摘するように、「世界共和国」の組織や目的が「国際連盟に不思議なまでに似かよっている」<sup>(9)</sup>ことも認めなければならぬ。あるいはまた、第一次大戦に参戦する直前のアメリカの新聞や雑誌の論調が「アメリカ人は旧世界の墮落ぶりをもはや我慢することができない、という一八九二年の『黄金の壺』におけるイグネイシャス・ドネリーの予言」に合致している<sup>(10)</sup>、というD・W・ノーブルの発言があつたことも思い出される。そこでの指摘によると、ある雑誌の論者は「ヨーロッパの国の大部分には新世界の精神が及んでいるが、一つの強国〔ドイツ〕とその衛星国はいまだに旧世界的な専制の精神をいだいている」といったドネリー顔負けの表現を用い、また別の編集者は「合衆国が参戦するときは、最低の種類の貴族主義の転覆に力をかす偉大な民主主義国としてであるだろう」などと書いている。ノーブルの指摘しているように、『黄金の壺』のベネゼット大統領の「至福千年主義」がウイルソン大統領のそれと同質のものであるとすれば、一体その事実をどのように理解すればいいのだろうか。いや、アメリカ国旗が人類全



体の旗じるし、「しいたげられた者たちのための正義」の旗じるしであるという発想は、ついこの間までのヴェトナム戦争にも見られたことを考えると、アメリカ的意識におけるジェファソン主義の根ぶかさに思いをいたさないうちはいられないのだ。

ところで、『黄金の壺』の結末はどうなっていたか。ヨーロッパから意気揚々と帰国したところで、エフレイムの夢はさめ、「恐るべき現実」の世界へつれもどされる。黄金の壺などどこにもなかったのであり、愛するソフィーはカンザス・シティで身をもちくずし、首をくくって死んでしまった、という悲報が彼を待っているばかりなのだ。「救済された世界から破壊された世界」へつき落とされるという「おぞましいショック」に主人公は気も狂わんばかりになるが、やがて登場する奇妙な訪問客によって励まされ、「微力をつくして戦うこと」を決意するにいたる。「そして、ぼくはこの物語を世間の人に語ろう」という言葉で、この小説はおわっているのだが、この結末は、マーティン・リッチがいうように、「ベネゼットが人民党の真実に目ざめた」こと、農場を去る結果になるにもかかわらず、「彼は人民党の計画が創り出すことのできるユートピア的世界のために働く準備をしている」ことを暗示しているかもしれない<sup>(11)</sup>。

だが、『黄金の壺』の出版から百年近くたった現在の読者としては、そのような楽観的な結果をそのまま受け入れることができない。ベネゼット大統領の千年王国もウイルソン大統領の千年王国もついに地上では実現することがなかったのではないか。ポピュリズム的な理念が強調されればされるほど、ジェファソンの共和国の過去へ回帰することの不可

能性を意識させられることになってしまう。結局のところ、「救済された世界」と「破壊された世界」の落差はあまりにも大きく、そこに世紀末におけるアメリカの「文化的危機」を読みとらざるを得ないのである。一七七六年に確立されたアメリカ的空間、時間と変化に支配されることのないアメリカ的世界は、一八九二年にも、一九一七年にも（そして一九七九年の現在にも）ついに再現されることはないのだ。

もちろん、こうした「文化的危機」を感じとったのは『黄金の壺』のドネリーだけではなかった。この小説の翌年に発表された「アメリカ史におけるフロンティアの重要性」のF・J・ターナーにも、その「危機」がうかがわれることは、今さららしくいい立てるまでもあるまい。フロンティアを失ったアメリカが文明の進歩とともにヨーロッパ的な状態になってしまうのではないか、という不安がターナーにあったことはしばしば指摘されている。だが、一九〇〇年に出版されたL・F・ボームのファンタジー『オズの魔法使い』にもまた、アメリカ的空間の崩壊が影を落としているといえ、読者は意外に思われるかもしれない。たしかに、この作品は子ども向きの童話、少女ドロシーの経験するたあいなない物語にすぎない。真剣な議論の対象にさえならないではないか、といわれそうだが、この作品の冒頭において、女主人公が早魃に悩むカンザス州の片田舎に住んでいたという事実を見落とすことはできない。同じカンザスの農場に住んでいたエフレイムとドロシーが「黄金の壺」や「魔法」によって、それぞれ新しい空間を発見するにいたるといえるのは、単なる偶然の一致ではあるまい。それはなによりもまず、失われたフロンティアに対するアメリカ人のノスタルジアを反映していると考えられる

のである(12)。

どうやら、『黄金の壺』は一般に広く思われているようなユートピア小説ではないようだ。そこにはテクノロジーと牧歌的理想にひきまかれた世紀末アメリカの緊張と苦悩がくっきりと浮かびあがっているのである。『シーザーの記念柱』とともに、アメリカ的メンタリティを研究するための文献として、あらためて読み直される必要があるように思われない。

#### 注

- (1) D. W. Noble, *The Progressive Mind* (1970), p. 1.
- (2) 以下の本論はエネリーに関する拙稿の一章である予定であることをお断わりしてほしい。
- (3) Ignatius Donnelly, *The Golden Bottle*, ed. with a new introduction by D. W. Noble (1968) を用いた。
- (4) Norman Pollack, ed., *The Populist Mind* (1967), pp. 59—60.
- (5) Martin Ridge, Ignatius Donnelly: *The Portrait of a Politician* (1962), p. 304.
- (6) Cf. J. W. Ward, *Andrew Jackson: Symbol for an Age* (1955).
- (7) E. L. Tuveson, *Redeemer Nation: The Idea of America's Millennial Role* (1968), p. 167.
- (8) Cf. Charles Sanford, *The Quest for Paradise: Europe and the American Moral Imagination* (1961).
- (9) Ridge, p. 305.
- (10) Noble, pp. 176—77.
- (11) Ridge, p. 306.
- (12) 『米国の憲法史』216—217 Peter N. Carroll and D. W. Noble, *The Free and the Unfree: A New History of the United States*

(1977), p. 242 に短い興味ぶかい解説がなされている。

原稿受理 一九七九年六月二十九日

## Donnelly's American World: *The Golden Bottle*

Koji Oi

Known as Populism's great orator, Ignatius Donnelly (1831—1901) was a prolific writer in various fields, publishing *Atlantis* (1882) and *Ragnarok* (1883), both books on popular science, *The Great Gryptogram* (1887), in which he proclaimed that the author of Shakespeare's plays was Francis Bacon, and three novels, *Caesar's Column* (1889), *Dr. Huguet* (1891) and *The Golden Bottle* (1892). In this discussion of his third novel, I have concluded that, despite its apparent optimism, it expresses the identity crisis of the American people caused by the emerging new reality at the end of the nineteenth century and that, by reading this "fantasy", we can fully understand the meaning of Donnelly's fears at the collapse of an American space which were shared by his contemporaries such as Josiah Strong and F. J. Turner.